

『青森県史 通史編1 原始・古代・中世』(第三章～第六章)

永田 英明

はじめに

本書は、平成三〇年三月に、『青森県史』全三六巻の掉尾を飾る通史編三巻の一つとして刊行された。二〇年以上にわたる編さん事業に尽力された関係者の方々の成果が結実したことを、何よりもお祝い申し上げたい。すでに刊行されている『青森県史 資料編 古代』二冊は、広く東北地方に関する古代史料を網羅し、近年の東北古代史研究に計り知れない貢献を果たしてきている。この通史編もまた、東北古代史や北方古代史を牽引されてきた方々が執筆を担当され、刊行を心待ちにしていた本であった。

本稿では、第三章から第六章に至る部分について扱うこととなっている。該当箇所だけでも三二〇ページにわたり、弥生時代から院政期にわたる叙述を細かくご紹介する余裕はないが、本書の特色とみられる点に焦点を当てる形で、簡単な紹介を若干の感想を交えながらさせていただきます。

一

まず第三章「北限の稲作農耕」・第四章「古墳文化とあおもり」をま

とめて紹介することとする。

青森県の弥生時代研究といえば、東北地方における弥生農耕の存在を証明した垂柳遺跡や砂沢遺跡の調査があまりにも有名だが、第三章ではまず第一節でその後の近年の調査によって明らかにされている津軽地方や南部地方における水田遺構、その他の稲作の痕跡が紹介され、また遠賀川系土器の分布状況を手がかりにした稲作伝播ルートの問題などがとりあげられている。第二節では集落・墓制や土偶などの祭祀遺物、土器などの様相が紹介され、第三節ではそれらを踏まえた上で県内における続縄文文化と弥生文化の関係が論じられている。その総括に依れば、稲作そのものについては津軽平野や南部地方で稲作の展開を確認できるが下北半島や津軽半島では漁撈を中心とした採集経済に比重を置いていたと見られること、他方で祭祀遺物の在り方においては津軽や南部を含め西日本のような農耕祭祀の痕跡を確認できず、縄文文化の伝統をひく土偶祭祀が地域全体で継続したと見られること、弥生後期には津軽や南部でも集落規模が縮小し、その後古墳時代に向けた農耕社会としての発展を見いだしたいことなどが述べられる。北奥地域独特の弥生文化受容・展開の在り方が、その中での地域性の問題とともにまとめられているといえよう。

第四章は、まず古墳の発生と古墳文化の全国的展開過程を概観したうえで、東北地方における古墳文化の展開を続縄文文化との交錯という観点から解説し、それらをうけて青森県内における様相を詳述する。まず県内への古墳文化伝播の様相を物語る事例として五所川原市隠川遺跡や八戸市田向冷水遺跡がとりあげられ、後者については竪穴住居や出土土

師器・続縄文土器などの様相から、東北地方南部からの移住者が在地系の続縄文文化の人々を取り込む形で開拓したムラという見通しを提示しつつ、その生業については稲作を基本としながらも周辺の環境からサケ漁や皮革加工に従事した可能性を指摘する。一方続縄文文化の系譜を引く族長墓として七戸町森ヶ沢遺跡や八戸市市子林遺跡など、袋状小穴を伴った土坑墓に土師器や須恵器、鉄製品など古墳文化に属する副葬品を伴う事例をあげ、地域における一定の有力階層の出現を読み取る。これらをふまえ、遺跡の分布密度が希薄でかつ小規模であること、住居や土師器などで古墳文化の影響が認められる一方で墓制や続縄文土器・黒曜石など北方的要素を強く併せ持っている点を青森の古墳時代の特徴と総括し、皮革製品や鉄製品などへの需要が古墳文化の社会と続縄文文化の社会との交流・交易を促し、その中で、青森県内においても生業や交易上の重要拠点を中心に、在地の人々を取り込みながら移住者のムラや墓が形成されたのではないかという見通しが述べられる。

二

第五章「古代エミシの時代」は七世紀から九世紀前半に至る時期を扱う。それは東北北部の住民が文献史料上に「エミシ」（蝦夷）という名前で登場する時代と重なり、青森県域の住民を含むこの「エミシ」および彼等と古代国家との関係がテーマと言えよう。

第一節「エミシとは何か」では、「毛人」から「蝦夷」を経て「蝦夷」へとエミシの漢字表記が中華思想や仏教的世界観を借りる形で差別的意

味を強めていくことや、近代以降エミシを語る上で必ず問題にされてきた、エミシとアイヌとの関係といった問題に筆が割かれる。特に後者については、埴原和郎氏などが提唱する「二重構造モデル」論に基づき、古代においては現代よりも、北海道や沖縄を含む列島内での形質的な差異は小さかった筈であるからエミシがアイヌであるか否かという問い自体が意味を成さない、との説明がされている。同時にまたアイヌ文化自体が未形成である古代において「アイヌ」という概念を使用することは誤解を招くとして古代のエミシとの関わりでこの語を使用することに注意を促しており、適切な提言であろう。もともと本節ではエミシの言語や生業の問題など、かつてエミシ＝アイヌ説をめぐる論点としてとりあげられてきたエミシの生活文化に関する問題については殆ど言及されていない。あくまで両者は別個の問題でありそれらは第二節以降の本編に譲るということなのかもしれないが、この点少しだけでも言及があっても良いように感じた。

第二節「七世紀の北方世界」は、阿倍比羅夫の北方遠征記事や六五九年の遣唐使に同行した蝦夷をめぐる問題を中心に、七世紀における蝦夷政策、それと北方世界との関係について述べる。なかでも津軽エミシについては、王権への服属の時期・比羅夫の軍事行動における扱い、遣唐使による唐皇帝への説明などをてがかりに、律令国家と渡嶋・野代・秋田などの北方エミシ集団との政治的関係を仲介する存在として重要視されてきたことを指摘する。

一方考古学的な知見から、七世紀から八世紀にかけての青森県域の社会を叙述したのが第三節「古代エミシの集落と末期古墳」である。八戸

市やおいらせ町など南部地方を中心に分布する七世紀の集落跡や丹後平・阿光坊などの末期古墳などが取り上げられ、またこうした末期古墳の副葬品（銚帯金具、銭貨、馬具、蕨手刀などの刀剣、石製・ガラス製の装身具、須恵器）などを手掛かりに、南方の律令制施行地域との交易の盛行を指摘する。一方津軽平野については、秋田市周辺で生産された須恵器の流入が確認できること、一方で鱒ヶ沢町金沢街道沢（1）遺跡、五所川原市中島遺跡などで出土した、多条沈線文をもち擦文土器に近いとされる甕などをてがかりに北海道方面との交流も想定できることから、津軽エミシが律令国家という権力の許に組み込まれ交易活動を行っていたのではと推測している。

第四節「律令期の北方世界」では出羽国の成立、多賀城創建から桃生・雄勝・伊治城といった八世紀における東北政策の展開とともに、八世紀における津軽エミシと古代国家の関係がとりあげられる。第二節や第三節での内容をも受けて、北方の蝦夷諸集団、とりわけ秋田・野代・津軽・渡嶋といった日本海沿岸地域のエミシ諸集団が相互に自立的な関係を保ちながらも海路を通じて「北日本海地域ネットワーク」と呼ぶような関係を形成していた、との見通しを提案し、七二〇年に登場する「渡嶋津軽津司」を律令国家がこうした「北日本海地域ネットワーク」を掌握するために置いていた官であるとしている。もつともその一方で、津軽のエミシ集団が八世紀に入ると、渡嶋蝦夷と対照的に記録から姿を消してしまうことにも注目し、『陸奥国風土記』逸文に於ける津軽エミシのイメージも手掛かりに、実際には八世紀に入ると津軽エミシが律令国家にとって敵対的な勢力に転じていたのではないか、との見通しをも

述べている。続く第五節「三十八年戦争と北方世界」では、宝亀年間ははじまる三十八年戦争の推移が叙述されるが、津軽エミシと律令国家との関係は変わらず、八一四年の「津軽狄俘」等への警戒を理由にした胆沢・徳丹城への糧貯備命令も八世紀以来の津軽エミシに対する認識を引き継いだものと評価している。

第三節で考古学資料から提示されている北方諸集団と南北地域との交流の様相と、第四・五節で提示された津軽エミシとの関係をどのように理解するべきか、現状ではまだ適切な見通しを述べることは難しいところであろう。南部地方の末期古墳の状況からはこの地域の首長が律令制施行区域との政治的・文化的接点を持っていたことは否定しがたいが、では津軽地方における末期古墳についてはどのように評価すべきなのか、第四節等で「敵対的」と表現されている国家とエミシの関係の理解に関わる問題であり、今後の課題ともなろう。

三

第六章「古代エミシからエゾへ」は、九世紀後半から十二世紀にかけての時期を対象とする。一四四ページと本書中最も多くページ数が割かれた章であり、執筆者も七人にわたるなど、多彩な視点から重点的に執筆された章である。北奥地域に現れる様々な固有の問題をふんだんに盛り込んだ、本書の大きな特色をなす部分と拝読した。まず第一節から三節までを紹介する。

第一節「エミシからエゾの時代へ―序論」は、本章全体の内容を、東

北北部の住民を指す「エミシ」という概念が消滅し北海道の住民を指す「エゾ」という概念が登場してくるこの意味と絡めて解説する。

第二節「元慶の乱と津軽エミシ」は、元慶の乱の叙述を通して、九世紀後半の津軽を含む北奥のエミシ集団と国家の関係を叙述する。津軽エミシの動向に関する叙述は、前述の第五章の叙述ともあわせて読む必要がある。元慶の乱で津軽エミシは「その党種多く幾千人なるを知らず」と記されるように、多数の集団からなる強大なエミシと認識され、その帰趨が国家の大きな関心事だったこと、津軽エミシの「賊に連ならざる者百余人」が渡嶋蝦夷と共に帰服してきたという三代実録の記事から逆に大多数の津軽エミシが反乱軍に加わっていたなどが指摘され、さらにそこから、米代川流域の村々を中心としたエミシ集団と津軽エミシとの間に普段から活発な交流があったことを読み取る。そうした関係性についてもまた、津軽地域での考古学的な知見とどのように整合させて理解できるかが課題となろう。

その考古学的な知見をもとに九世紀後半にはじまる社会変化を叙述するのが第三節「九世紀後半―一世紀のあおもりのいとなみ」である。青森平野・津軽平野の丘陵部では九世紀後半から、津軽平野の低地では一〇世紀中頃から集落が爆発的に増加し、南部地方でも小川原湖周辺や野辺地湾に面した丘陵などで一〇世紀を中心に数多くの集落が出現。さらに田舎館村前川遺跡の水田跡や青森平野・津軽平野で見られる沖積地の河川に対応した水路などからこの時期に稲作が本格的に再開されたと見られること、鱒ヶ沢町杣沢遺跡や八戸市荒屋敷久保遺跡など県内各所での製鉄遺跡やこれともなう鉄製品がこの時期に増加することなどが

記される。そしてさらにこの九世紀後半を画期として五所川原須恵器窯跡が操業を開始する。九世紀後葉から一〇世紀前葉の五所川原窯跡産須恵器は津軽地方を中心とする周辺集落への碗・皿などの提供が主で、それは前述の集落の激増に対応すると考えられる。その生産主体について本書は「律令国家側の強い関与があつての開窯とみるべきか、それともエミシ集団の自立性の表れとみるべきか」と、慎重な書き方に留めながら課題を提示している。

祭祀・信仰などに関しても、平川市鳥海山遺跡で出土した「大仏」刻書須恵器皿や新田（1）遺跡出土の木製形代・斎串、神像、仏像などから神仏習合的な宗教祭祀の受容が述べられるが、さらにこうした信仰の問題とも絡めながら県内出土の墨書・刻書土器の様相についてもページ数が割かれている。ここでは青森県内の文字資料の特徴として（1）墨書土器等の文字資料が広く使用され始めるのは九世紀に入ってからであること（2）墨書土器のほとんどは、一般の集落遺跡から出土する一〜三文字程度のもので、信仰との関わりが考えられること、（3）津軽地方では五所川原須恵器窯産とみられるヘラ書きの刻書土器の割合が高く、文字を解する人の須恵器生産への従事がうかがえること、（4）前記の「大仏」刻書の須恵器の他、米代川流域から津軽・南部地方一般集落で「寺」墨書土器が出土し、エミシ社会集落の日常生活のなかにおける仏教的信仰の受容がうかがえること、（5）下谷地（1）遺跡の「神人」墨書やカマドや水場からの墨書土器出土例などから、墨書土器が律令制施行区域からの影響で伝播したとみられること、（6）一方で新田（1）遺跡出土の「忌札見知可」と書かれた木簡の出土など律令制の影響を受

けながらもこの地域独自に変容した祭祀の存在をうかがわせる事例があることなど、この時期の北奥地域社会に特有の文化受容の様相が多彩に描かれ、興味深い叙述である。

四

第六章第四節「一〇～一一世紀のおももり」は、「九世紀後半～一〇世紀」を扱う第三節と时期的に重なるが、考古学的知見に基づき生業・生産や祭祀・文字文化など生活・文化の状況を叙述する第三節に対し、鎮守府將軍や秋田城介による奥羽支配（第一・二項）、その鎮守府や秋田城の在庁から成長したとみられる安倍氏や清原氏の台頭（第六項）、前九年合戦（第七項）などを叙述する第四節は、いわば北奥地域の政治的変動に重きを置いた叙述、と整理できようか。

そしてこの第四節を特徴付ける最も重要な要素が、いわゆる「防御性集落」の問題である（第三・四項）。一〇世紀後半頃に北奥地域に広く出現する「防御性集落」は、青森市高屋敷館遺跡の発掘調査などをきっかけに一九九〇年代以降本格的な研究対象として大きな注目を集めるようになった。本書では「環濠を伴う集落のなかに防御的性格を持つものを認め、そうした集落に限り、「防御性集落」という呼称を用いる」という立場を明示した上で、その構造的特色や類型、さらにはその形成過程をめぐる現段階の研究上の成果や課題を、高屋敷館遺跡や八戸市林ノ前遺跡の成果を中心にしたかたちで簡潔に整理している。評者が特に興味を感じたのはその形成史にかかわる問題で、高屋敷館遺跡では九世紀

後半から一〇世紀前半にかけ他地域からの系譜とみられる「竪穴・掘立併用建物」の集落が周辺地域に林立し、それらを束ねる共通の規制を持った勢力の存在が想定されている。林ノ前遺跡でも一〇世紀前半から中葉にかけての周辺地域での新興集落の形成がみられ、そのあとに環濠を持つ林ノ前遺跡が成立するという。こうした知見は、前節で触れられた九世紀後半以降の北奥地域での人口増という動向と防御性集落の成立との関係を考える素材となり、防御性集落の歴史的性格を考えるための重要な知見であろう。

本書では、こうした防御性集落出現の背景について、十世紀における城柵を介した朝貢制的支配の衰退とそれにかわる鎮守府將軍などを介した交易制の展開によってもたらされた、北奥の珍奇な産品に対する収奪の強化がエミシ社会の中に新たな緊張を生み、それが防御性集落を作り出した、という見通しを提示している。

第五項「本県域と南北世界との交流」は、そうした収奪強化の背景とされる北方交易の様相を考古学的知見によって跡づけるもので、陸奥湾沿岸地域における擦文土器の分布・生産の問題や、五所川原窯産須恵器の流通が北海道へも拡大していく状況（ただし一〇世紀前半には衰退期に入ってしまう）なども述べられる。そして前九年合戦につらなる安倍・清原氏の形成の問題を扱う第七項では、「鉈屋・仁土呂志・宇曾利三部の夷人」の長として『陸奥話記』に登場する安倍富忠の存在に注目し、奥六郡の安倍氏がその北方の「夷人」の世界にも同族的結合を広げ、北方の富の収奪に安倍氏が主体的に関与していたとの見通しを示唆している。

五

第六章第五節「一二世紀のおももり」は、前九年合戦後の十一世紀後半から奥州藤原氏が奥羽全土を掌握する一二世紀にかけての時期を扱う。第一項でとりあげられているのがいわゆる延久北奥合戦をめぐる問題で、近年その意義が再評価されるに至った陸奥守源頼俊と鎮守府將軍清原真衡（真衡説もあるが本書では真衡説を採用）による「エゾ平定事業」の実像を政治状況と絡めながら整理。ついで第二項で後三年合戦の経緯、第三項で藤原清衡の平泉開府、基衡から秀衡に至る奥州藤原氏の奥羽支配の推移が描かれる。

第四項「奥大道」と平泉文化の北上」では、考古学的知見をもとにこうした時期における青森県内の様相を述べたもので、青森県域での中世の開始が「平泉文化」の強い影響のもとに登場したとの見通しを提示している。地域内における土師器や須恵器生産は終焉を迎え、珠洲焼、瀬戸焼などの限定された主要産地からの製品が広域的に流通している点を、北奥地域が中世的広域流通経済圏の中に明確に組み込まれた現象と評価し、また平泉との関係をより積極的に理解できる例として、一二世紀後半のかわらけや中国製白磁四耳壺などを出土する浪岡城跡内館、一二世紀後半～一三世紀のかわらけや中国製白磁碗・青磁碗、渥美や珠洲を出土する弘前市中崎遺跡、陸奥湾に面し一二世紀のかわらけや中国産白磁・青磁、渥美・常滑・珠洲などを出土する石江遺跡群などをあげる。津軽地方で発見されている経塚関連の遺物、とくに平内町白狐塚で発見

されている一二世紀頃の経塚出土品等もまた奥州藤原氏との強い関わりが想定できるという。

以上をふまえ、第五・六項では北奥地域に対する「日本国」の領域支配にかかわる問題がとりあげられる。とりわけ大きな問題が、第五項でとりあげられる、北奥地域における郡郷制の施行の問題であろう。現在のこの点については、①一一世紀後半の延久北奥合戦を契機に一気に陸奥国の北奥への領域支配が拡大されたとみる見解と②奥州藤原氏の清衡の時代に入ってから新たな奥羽支配の再編によるものとみる見解とが提起され決着を見ていない。本書でもこの点は慎重な筆致で明確に記してはいないが、美濃・常滑焼やかわらけなどの分布状況に置ける津軽と平泉の共通性などから、②の可能性を示唆しているようにも見える。また第六項「九戸四門制」は、糠部地域に特有の「〇戸」という行政区域の問題がとりあげられ、それが鎌倉期以前に遡るとみられること、同地における馬産とのかかわりを想定できることなどを述べている。

最後の第七項では、「防御性集落」の消滅の問題について触れる。防御性集落の終焉は考古学的にはまだ課題が残るものの、十一世紀代とされておき、ここでは延久北奥合戦から後三年合戦、さらに清衡期における「北国凶賊」征討と奥州藤原氏による奥羽支配によってもたらされた「奥州の真の平和」が、防御性集落を消滅させ、また郡郷制の施行につながったのではないかという筋書きが、慎重な筆致ながらも示されている。防御性集落の問題が本章の末尾で叙述されていることは、本書が青森県域を含む北奥地域の平安時代史を描く素材としてこの問題を極めて重視していることを、よく示している。

おわりに

本書の最大の特徴を挙げるならば、やはりなんと言っても、近年における豊富な北方古代史研究の成果を盛り込み、地域独自の古代史像を描き出す実験的な試みがなされている点であろう。先に述べた防御性集落の問題に限らず、稲作の成立とその後の消長、末期古墳の様相、津軽エミシをめぐる論点、九世紀後半以降の集落数の激増、五所川原須恵器窯跡の問題、北奥地域における郡郷制や九戸四門制をめぐる問題など、本書を通読すると、この地域に特有の、しかしながら「日本史」や「東北史」の捉え直しを迫る研究課題が極めて豊富にあることをあらためて実感する。

本書では、叙述の各所で様々な南北世界との間の「交流」の様相が述べられ、これもまた大きな特色と言うことが出来よう。それは同時に北奥地域における地域性、地域関係の問題にも興味を向かせてくれる。大きく分けて津軽と南部、さらに細かな地域区分の中で、現在青森県として一括されているいくつかの地域を古代史の中の地域間交流の中でどのように捉え直せるのか。例えば津軽地方と南部地方とは当然周辺地域との政治的・経済的関係のありかたに相違があり、またそこには歴史的变化があることも本書の各章・各節の随所に看取される。本書によってまとめられた知見によって描き出される様々な地域間交流から、さらなる多くの課題も生まれてくるように感じた。

少し長いスパンでの叙述が必要なテーマについて、時代ごとに区切ら

れた各章でやや輪切りにされがちである点は少し気になった。例えばコラムなどの形で少し通時代的な解説のようなものがあったても良かったかもしれない。とはいえこの点は各章の中で、前後の時代への見通しを重複をいとわず叙述することでカバーされており、問題とするにはあたるまい。平易な語りの中に最新の知見や課題をふんだんに盛り込んだ本書が、東北古代史・北方古代史を学ぶ者にとっての新たな入口として、また「北からの日本古代史」を考える入り口として、多くの方々に読まれ、語られることを願う次第である。

(菊版、七八七頁、青森県、平成三十年(二〇一八)三月十五日刊行、

本体価格三二〇〇円+税)

(ながた・ひであき 東北学院大学教授)